

井上靖先生と文学碑

昭和53年8月26日、除幕式から



の わけ やかた 井上靖記念館「野分の館」室内



昭和60年3月に完成し、文学碑となりの高台に位置しています。先生の詩「野分」にちなんで名付けられました。展示室には年譜と写真、原稿や著書などが、並べられています。入室はご自由ですので、ごゆっくりとご覧下さい。

また、井上靖全集を日南町図書館にて取り揃えていますので、是非ご利用ならびにお問い合わせ下さい。

※記念館「野分」に自由ノートを備えています。来訪の記念に是非ご記入下さい。

交通のごあんない



井上靖直筆「學舍百年の石碑」(旧福栄小学校前建立)

井上 靖文学碑に関するお問い合わせは

〒689-5292 鳥取県日野郡日南町霞800番地

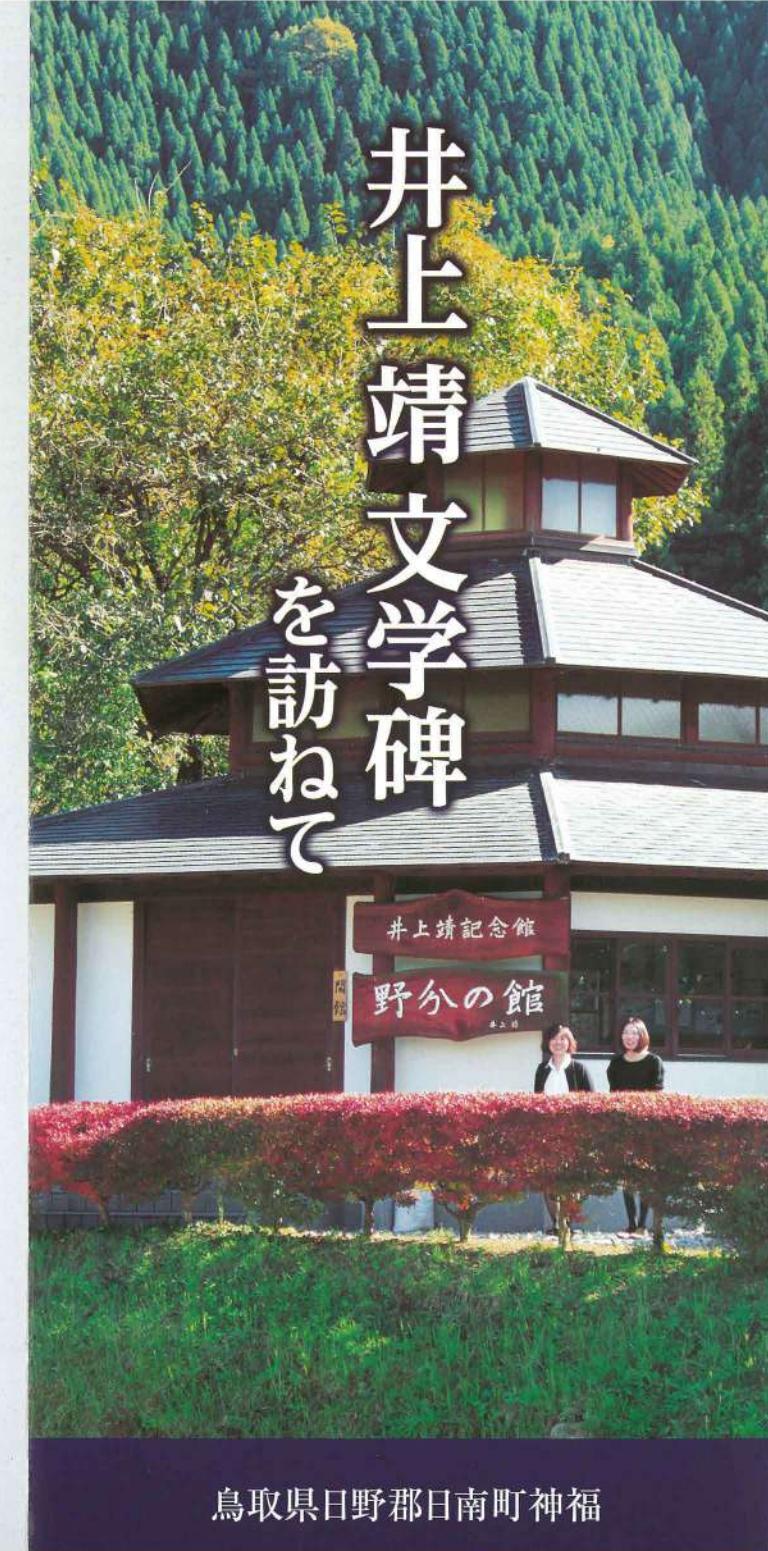
日南町役場企画課

Tel. 0859-82-1115 Fax. 0859-82-1478

ホームページ <http://www.town.nichinan.lg.jp>

Eメール info@town.nichinan.lg.jp

井上 靖 文学碑
を訪ねて



鳥取県日野郡日南町神福

ふるさと（井上靖詩集「遠征路」より）

「ふるさと」という言葉は好きだ。古里、故郷、どれもいい。

外国でも「ふるさと」という言葉は例外なく美しいと聞いている。

そう言えば、ドイツ語のハイマートなどは、何となくドイツ的なものをいっぱい着けている言葉のような気がする。漢字の辞典の援けを借りると、故園、故丘、故山、故里、郷邑、郷閑、郷園、郷井、郷陌、郷閭、郷里、たくさん出てくる。故園は軽やかで、颯々と風

が渡り、郷閑は重く、憂愁の薄暮が垂れこめているが、どちらもい。しかし、私の最も好きなのは、論語にある「父母國」という呼び方で、わが日本に於いても、これに勝るものはないなさそうだ。「ふるさと」はまことに、「ちちははの國」なのである。ああ、ふるさとの山河よ、ちちははの國の雲よ、風よ、陽よ。

井上靖先生とのふれあい

当時、毎日新聞の記者であった井上靖先生は、大阪での戦火をさけるべく縁故を頼って、鳥取県日南町神福（旧福栄村）の太田集落に奥さんや子どもたちご家族を疎開させられました（「曾根の家」と呼ばれ、跡地には土台が残っています）。こうしたご縁から終戦前後にかけて先生自らも、しばしばこの地を訪ねられ、先生の脳裏に深く焼き付けられた中国山地の印象は、後の小説「通夜の客」、詩「高原」「野分」などに鮮やかに表されています。

天体の植民地と謂われた日南町の美しい自然、人情、風俗は先生によって広く全国に紹介されました。

日南町ではかつてのふれあいを永遠に残すべく、ゆかりの地に文学碑を建立しました。

また、昭和60年に先生によって名付けられた「野分の館」を建てました。

地元福栄では平成21年、井上靖「野分の会」を発足し、井上文学に思いを馳せています。



福栄地域の見所紹介

太田集落では、先生の「通夜の客」という小説の舞台に折り込まれている屋号が、各戸に看板として設置されています。

駱駝の瘤と称された小さな峠や近くの福栄神社など、当時の福栄の様子が窺えます。

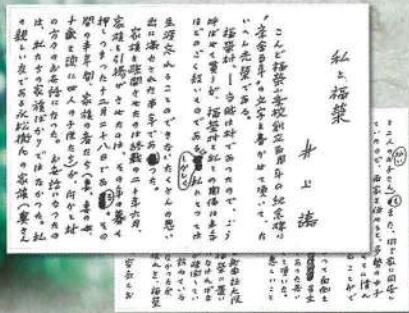


▲井上ふみ夫人の直筆
平成4年5月19日除幕



「野分の館」でのふみ夫人

「私と福栄」より



撮影：大塚清吾【書斎にて】

福栄村と私の関係は半年ほどのごく短いものである。しかし、私にとっては生涯忘ることのできないたくさんの思い出に満たされた半年であった。

家族を疎開させたのは終戦の二十年六月、家族を引揚げさせたのはその年の暮も押しつしまった十二月二十八日である。……

しかし、家族たちが疎開している半年の間に、何回か福栄を訪ねている。二、三日の短い滞在しかできなかつたが、烈しい空襲下にあった大阪の日々の疲れを、福栄の美しい風光の中で過すことができたのである。空気もおいしく、夜空にちらばっている星の光も美しかった。天の植民地にでも居る思いであった。夏の夜のたくさんの螢のことも忘れない。今でも、あのうなたくさんの螢が高く、低く飛び交うているであろうか。……

私は「通夜の客」という小説の舞台に当時の福栄村を使わせて貰っている。小説は全くのフィクション（作りごと）であるが、福栄村から受けたさまざまな印象は、そのまま小説の中に織り込んでいる。……

「私と福栄」より抜粋

●平成元年10月20日、日南町名誉町民の称号（第一号）を授与されました。

●平成3年1月29日、83歳にてご逝去。